

佐賀市のいろんな地区を歩く恒例の特集企画、「川上」「古湯」に続く第3弾は「蓮池」。かつて、筑後川と佐賀市中心部をつなぐ水運の要所として賑わった同地区には、往時の面影が今もなお残っている。街をぶらぶら歩くと、子どもから大人までいろんな人が声を掛けてくれる。見知らぬ人への心遣いは「湊町」ならではの、と感じる。またその話の端々に、自分たちの街への誇りを感じる。蓮池は、ちょうど良い優しさに満ちていた。

蓮池は 優しい

特集

今回、「蓮池」を選ぶきっかけになったのは「県都物語 47都心空間の近代をあるく」という本。都市工学者・西村幸夫さんが全国の県庁所在地を歩いてまとめた労作だ。その中の「佐賀市」の項には「平野に浮かぶ水網都市」というサブタイトルが付けてあり、川やクリークの活用が佐賀という街を作り上げたことが書かれている。特に佐賀市中心部から蓮池まで流れる「佐賀江」が佐賀という街を支えたことがクローズアップされている。

■「小曲」の跡を探す

佐賀江についてさらに詳しく知るために、「県都物語」が参考になっている「佐賀平野の水と土」（江口辰五郎著、1977年）を読んでみる。古代、佐賀の交通は北部が脊振山系の山裾に官道、南部は海岸線に水運があった。海岸線には海拔4メートルの地点に「津」と呼ばれる湊があった。蓮池の湊・蒲田津もその一つで、肥前国風土記にも記述されている。中世、荘園の年貢米の輸送拠点として栄えた蒲田津だったが、江戸時代初期、佐賀藩祖・鍋島直茂公が佐賀城を築くにあたり、筑後川から城下への輸送ルートとして今宿江湖（佐賀江）を運河として利用すると、物流拠点として更に大きな役割を果たすようになった。

元々、佐賀江は有明海の干満によってできた大きな滞筋（川を断面で見たときに最も深い部分で、主に水が流れているところ）である「江湖」のひとつだった。そこに「運河」としての機能と、「洪水対策」を付け加えたのが、治水の神様・成富兵庫茂安だ。成富は川幅を水運に適する規模まで拡大。さらに下流部分を大きく蛇行させる「大曲」「小曲」という個所を作り流域面積を広げることで、川全体の貯水能力を高めた。成富の佐賀市での功績としては「多布施川」を中心に語られることが多いが、「佐賀江」とセツトでなければその真価は伝わらない。

座学はここまでにして、佐賀江を見に行ってみる。まずは蓮池公園からスタートだ。現在、佐賀江は1996年に終わった大規模改修により「佐賀江川」となり、今宿から筑後川までほぼ直線的に流れている。蓮池公園も現在は佐賀江川によって南北に分断されているが、かつては公



「小曲」の趣が残る蓮池公園



河口から見る佐賀江川



園を取り囲むように川が流れていたようだ。ここが「小曲」であり、佐賀藩の支藩のひとつ、蓮池藩はこの辺りに陣屋を構えていたという。今では公園の東西にある「堀」のような水路にその名残を留めるのみだ。大曲は完全に農地と一体化しており、その面影も探すことはできなかった。

蓮池公園から川沿いを蒲田津方面へ歩く。ところどころに菜の花が咲き、カチガラスが砂利道で遊ぶ。ゆうゆうと流れ

る佐賀江川の水面は陽光にきらめき、春の訪れを感じさせる。「こんにちわ！」。後ろから元気な声がしたので振り返ると、自転車に乗った女性が声を掛けてくれたのだ。あわてて挨拶を返すと笑顔でスーッと通り過ぎていった。

■川とともに生きる

10分ほど歩くと、田園地帯から住宅街になっていく。気分を変えて家並みの中

を歩く。道幅が狭く、古い街であることが分かる。南北方向は直線だが、東西南方は曲線。これはクリークがあつた影響なのか？ そんなことを考えていると、前から車がやってきたので、道端に避ける。運転している女性がにこやかに会釈してくれる。小道の南端に川へ降りる斜面があつたので「舟着き場」かな、と思い写真に収める。この一角は古い町家がところどころにあり、「湊」の雰囲気は今に伝えている。と、こちらに手を振りながら女性が近づいてきた。よく見ると、先ほどの車を運転していた人だ。「写真を撮つてらっしゃったので、この辺りのことに興味があるのかなと思つて声を掛けました」。中嶋紀代美さん。地元の歴史を勉強するグループに所属しているという。今回の取材について説明すると、いろんな話を聞かせてくれた。

まず先ほどの川に降りる斜面はやはり「舟着場」。この辺りには肥料屋さんが何軒かあつて、その商品を運び出すのに使っていたという。「自分たちが小さい頃はプールもなかったので、この辺りの川で泳いでいました。大人たちが川を清掃してくれました。有明海は干満が大きいので、流れが速くなったり、逆流することがありますから、『流れが西のときだけ泳げ』つてきつく言われていました」と中嶋さん。子どもの頃から川のリズムを体で覚える。川とともに生活する様子



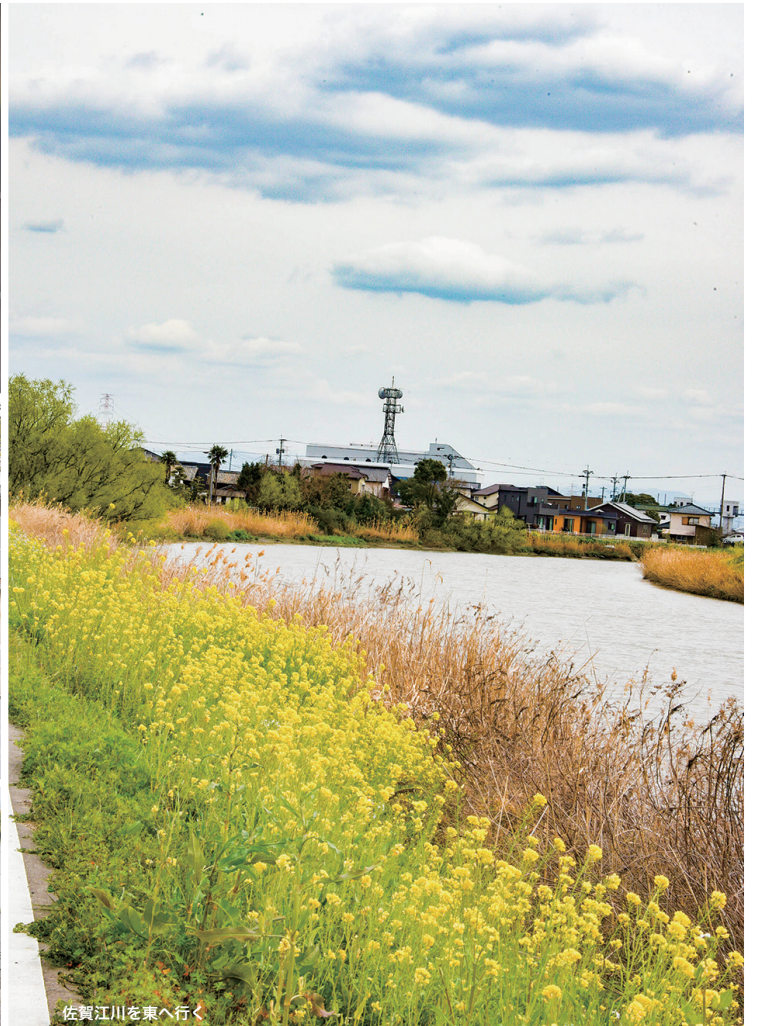
格子となまこ壁が印象的な町家



出雲神社の境内。昔は舞台があつたという



かつての船着場



佐賀江川を東へ行く



作業場で話を聞かせてくれる石川さん



空き地には遊具が置かれている



窓辺に置かれた石川さんのミシン



小さい路地に古い商家が残る

が伝わってくる。「夏といえば、大人たちが川から濁土を運んできて、石炭粉と混ぜて燃料を作っていました。型に入れて固めて強い日差しで乾かす。風呂を沸かす燃料1年分を作っていました。多分、炭団と言っていたのかな？ ちょっと自信がないので、詳しい人に聞いてみましょう。」

舟着場の通りを少し歩いたところにある仕立て屋さんにお邪魔する。通りに面した窓辺にあるミシンが印象的だ。昼食中か、中を覗くと不在。通りの向かい側にある自宅で中嶋さんが声を掛けてくれる。石川巖さんは87歳。仕事場に移動し話を聞かせてくれた。「確かに炭団つて言ってたよ。当時はお風呂を沸かすのに鉄砲釜を使つていて、その燃料でした。火付け用には、蒲田津の製材所からもらつてきた木くずを固めていました」と詳しく教えてくれた。「子どもの頃は、水道が通つてなくて、川の水を使っていました。天秤棒に桶を2つぶら下げて運ぶのが仕事でした。重くてどうしてもこぼれてしまう。水はそのまま飲んでいたなあ。川で泳ぐと、少し水を飲んでしまふでしょ。だから体が慣れていたんだろうね(笑)」と懐かしそう。石川さんは20代のとき、戦争特需にわく福岡で働いた以外は蓮池で生きてきた。「戦前は蒲田津に劇場があつて、お芝居を見に行っていました。旅回りの役者さんに街の女性

陣が夢中になったり賑やかでした。うちは元々、肥料屋でしたが、親父の代で洋服店になりました。この仕事場も以前は肥料倉庫でした。戦後、県庁や市役所の職員、学校の先生などの服装が洋服に統一されて、本当に忙しくなりました。職人を何人も抱えていましたが、注文を受けても数カ月待ち。その頃はこの界限だけで、5、6軒、洋服屋があつたかな。今では佐賀市内に数軒しか残っていません」と振り返る。「蓮池に戻ってから50年くらい。最近は目も見えづらくなつた。黒い布に黒い糸だとかまで縫つたか分からない(笑)。仕立ての仕事は基本的には受けずに、直しを頼まれてやるくらい。目が悪いので陽が射したときしか作業できない」と石川さんは窓辺に置かれたミシンを見つめていた。

古川さんにお礼を言つて、再び歩く。この界限には古い酒蔵があつたが、今は敷地全体が住宅地になり、真新しい戸建て住宅が並んでいる。中嶋さんは「学生の頃、夏休みに粕漬けを作るアルバイトをしていました。今でもあの匂いを覚えてます。思い出の建物がなくなるのは残念だけど、若い人たちがここで暮らしてくれるのは嬉しいですね」と語る。なおグーグルストリートビューでは、往時の姿を見ることが出来る。中嶋さんにその他のおすすめポイントを聞く。「最近、世界無形文化遺産に選ばれた見島(みしま)のカセ

鳥居の方へ歩くと小学生数人が声を掛けてくれた。「江崎利一さんの生家知っている？この先だから付いてきて」。言葉に甘えて進むこと数十秒。「江崎利一生涯」と書かれた立派な石碑があった。江崎利一はグリコの創業者。1882年、蓮池に生まれ。近くの漁港で水揚げされる牡蠣の栄養素グリコゲンの事業化に成功した。生家は民館として使われていたが、老朽化で数年前に建て替えられた。ちなみにこちらもグーグルストリートビューで見ることができる。

「グリコのマーク知っている？」と小学生。確か放送中の大河ドラマ「いだてん」の主人公・金栗四三がモデルになったとかいってなかったけ？「モデルはそうだけど、あのマークを思いついたのは八坂神社なんだよ」と、いうことで八坂神社へ。先ほどの直線道路の先に見えていたのが鳥居がそうだった。ここで行われる祇園まつりは、この地区最大のお祭りだそう。鳥居の脇にはかつて映画館があった敷地があった。

境内に入ると、まっすぐな参道が社に伸びている。子どもたちは誰からともなく、かけっこを始める。ゴールしたら自然に両手を上げている。あつグリコマークのポーズだ!! 江崎利一も、子どもたちの走る様子をここで見て思いついた、と自著「商売に生きる」に残している。

■歴史的瞬間を再現



そんな歴史的瞬間を再現してくれた子どもたち。本当に優しいなあ。

もう少し足を伸ばして、巨勢の龍津寺まで行く。ここは江戸時代、画家伊藤若冲や池大雅など、当時京都の文化人に大きな影響を与えた売茶翁が修行したお寺だ。現在、売茶翁顕彰碑はあるが、お堂など、お寺を思わせるような施設はなく、小さな建物が一つあるだけ。敷地を囲むクリークだけが当時の雰囲気を与えている。還暦のときに僧籍を捨て、京都で屋台のようなもので「茶銭はくれ次第、只飲みも勝手、只よりまけ不申候」と煎茶



売茶翁顕彰碑＝龍津寺



龍津寺を囲むクリーク



江崎利一について教えてくれた小学生



龍の鏝絵が印象的な商家



カセドリが奉納される熊野神社

た。数分ほどで小さな神社が見えてきた。「ここですよ」。道案内が終わると親切な小学生は颯爽と自転車を飛ばして戻った。

■海の道を実感



熊野神社まで案内してくれた小学生

「見島のカセドリ」はこの地区で小正月（旧暦1月15日、今では毎年2月の第二土曜日）に行われている伝統行事。土地の独身男性2人が藁蓑に身をつつみ、手甲、脚絆、白い足袋、笠を身につけ、カセドリに扮する。まず熊野神社の拝殿

に走り込み、先が細かく割られた長さ1.7メートルほどの竹を床に激しく打ちつける。続いて地区内の家々を順番に訪れ、その年の家内安全や五穀豊穡などの祈願のため、同様に竹の先で家の床を打ちつけて悪霊を払う、という行事。昨年、「来訪神・仮面・仮装の神々」のひとつとして「男鹿のナマハゲ」「宮古島のパーントウ」など計10件が国連教育科学文化機関により登録された。指定された10件はすべて島や港のある場所の伝統行事。「来訪神」が海の道を通ってきたと考えたと、カセドリは、この蓮池が古来より海の道で南方や北方ともつながっていた、ことを示しているのではないか。

道を戻り、学校の手前で右折。車道ほどではないが、幅の広い道がまっすぐ西へ伸びている。ところどころ趣のある商家が残っている。しばらく進むと神埼から流れてくる中地江川が見えてくる。この辺りが栄えたのは主にこの川での水運によるものだという。中地江川は南下して佐賀江川に合流する。橋を渡ると道は城原会館の前でクランクとなるが、その先はまた直線。ずっと先に鳥居が見える。直線の間間くらいに鏝絵が印象的な町家があった。二階の戸袋に左官仕事で施された龍の図柄。その遊び心に蓮池商人の粋を感じる。写真を撮っていると1台の車が。先ほどの中嶋さんだ。「映画館はこの先の神社の角にあったそうですよ」。本当に優しい。



江崎利一について教えてくれた小学生